腎臓内科

副病院長兼腎センター長兼統括診療部長　高田健治

診療体制と患者構成

診療科スタッフ

高田　健治：副病院長兼腎センター長兼統括診療部長
加瀬田幸司：腎臓内科科長
篠崎　有希：腎臓内科医長
平井　健太：腎臓内科医師
下畑　　誉：腎臓内科医師（非常勤）
小原　真美：腎臓内科医師（非常勤）
高橋真理子：腎臓内科医師（非常勤）

指導医・専門医・認定医等

高田　健治：日本内科学会総合内科専門医、日本腎臓学会専門医・指導医、日本透析医学会専門医・指導医
加瀬田幸司：日本内科学会総合内科専門医、日本腎臓学会専門医・指導医、日本透析医学会専門医・指導医
小原　真美：日本内科学会認定医、日本腎臓学会専門医、日本透析学会専門医
高橋真理子：日本内科学会認定医、日本腎臓学会専門医、日本透析学会専門医

外来診療実績

専門外来として月～土曜の計６コマの診療を行い、年間述べ4745名の各種腎疾患及び生活習慣病の管理を行った。

外来での維持血液透析を月～土の午前・午後の計４クール行っており、約140名の慢性透析患者を管理している。

少数ではあるが試験的に、近隣居住で通院困難な患者に対し送迎透析を継続している。

外来でシャントPTAを行っており、近隣透析施設からの紹介も多数受け入れている。

今まで透析室単独であったものを、腎臓内科外来を含めた腎センターとして再編成し、保存期から維持透析までを一元的に介入できる体制を整えた。

フットケア外来及び、外来維持透析患者に対するフットケアを行っている。

入院診療実績

2021年度腎臓内科入院患者数はのべ405名であった。

入院主病名内訳では、CKD関連が最も多く、以降は感染症、バスキュラーアクセストラブル、慢性及び急性糸球体腎炎、心不全、体液・電解質異常、AKI、ネフローゼ症候群、糖尿病加療等と多岐の病態に渡っている。

2021年度の当科での維持透析導入患者数は45名で、その大半を入院導入にて行った。透析導入原因腎疾患の内訳は、糖尿病性腎症が19名で最も多く、腎硬化症11名、慢性糸球体腎炎８名と続いた。

診療科紹介（概要）

高齢化社会や、生活習慣病の増加に伴い、慢性腎臓病（CKD）患者はいわば国民病といえる状況となっている。それに対し専門的治療を提供可能な腎臓内科の茨城県内における医師数や設置病院数は、十分に満たされているとは言えない状況である。

このような地域医療の現状の中で、専門医が複数常勤する当科の役割は大きいものとなってきている。

CKDのみならず、腎生検を必要とするような各種腎炎や急性腎不全等、多種に渡り診療を行っており、近隣からの紹介も随時受け入れている。

診療する主な疾患

慢性透析患者の合併症治療、バスキュラーアクセス治療、末期腎不全の血液透析導入、CKD及び生活習慣病の管理、ネフローゼ症候群、各種腎炎の管理、糖尿病の管理、体液・電解質異常の管理、多臓器不全時の急性血液浄化、各種アフェレーシス etc…

医療の質の自己評価

日本腎臓学会、日本透析医学会等への発表、聴講を通じ、医療情報のup dateを図っている。

また各種学会より発表されるガイドラインに準拠し診療を行っている。

入院診療においては一部クリニカルパスを導入し、診療の水準の均一化を図っている。

各自認定医、専門医取得を随時進めている。

手術・検査実績報告

手術実績

内シャント設置術：	77件
血管結紮術：	３件
血栓除去術	２件
カフ型透析用カテーテル留置：	32件
血管造影・シャントPTA：	122件

検査実績

2021年度は経皮的針腎生検を21例行った。

検査を受けるに至った臨床病名は、慢性糸球体腎炎11例、ネフローゼ症候群６例、腎機能障害４例であった。

その結果の病理診断は、IgA腎症９例、微小変化群

４例、血管炎３例、膜性腎症２例と続いた。

病理診断を踏まえ、その後の免疫抑制治療等の専門的加療を行った。

学会発表・論文など

服部晃久：第51回日本腎臓学会東部学術大会
検診異常から診断に至った腎限局サルコイドーシスの一例